

サブタイトル 魂の鏡

出演

男1 (山田)	22歳	
男2 (鈴木)	19歳	
女1 (ゆか)	20歳	
女2 (ひとみ)	21歳	
商店の人	78歳	
旅館の人	72歳	
村人1	73歳	シワガレ声
村人2	54歳	
ナレーター		

SE (おわおわおわ...)

村人1 「おい！ あんた！ 大丈夫か？」

男2 「んん...」

村人2 「お！ 目が覚めたぞ！」

男2 「え？」

村人1 「おい！ 救急車はまだか！」

男2 「僕は...」

村人2 「ああ！ 来た来た！ おーい！ こっちだ！」

男2 「僕は... たす... かった... のか... みんなは...？ みんな無事なのか？」

SE (救急車の音)

Σ 「皆さんが棲んでいるこの世は、ひとつの空間でしかありません...

皆さんも一度は思った事があるでしょう？ そう... “もし、別の道を歩んでいたらもっと幸せになれたのではないか？”と...

こんな話を聞いた事ありませんか...？ 鏡の向こうに別の世界があるのだと...」

SE (砂利道を歩く音)

2

女 1 「あ… 誰か来たようです… アウター・ザ・ワールドへようこそ…」

女 2 「アウター・ザ・ワールド その1 たましいの鏡」

SE (バスの音) プッシュ・ホーン・動き出す音

男 2 「僕は大学の旅行サークルのメンバーとして仲間と、とある山奥にある温泉村にやってきた…」

SE (砂利道を歩く音)

女 1 「しっかし暑いねえ」

女 2 「本当、あたしなんかシャツが汗でもうベトベト」

男 2 「おい、山田！ まだ歩くのかよ」

男 1 「もうちよつとだから」

女 1 「本当にあるの？ この先に温泉村なんて…」

男 1 「あるよ、今では平均年齢56歳っていう村だけど、この雑誌には“若者に田舎の良さを味わってもらう為に伝統のお祭りもある”って書いてあるし温泉に入ったり、郷土料理を食べたり、山の中で思いっきり自然を満喫しようってみんなで決めてきたじゃん」

女 2 「ちよ！ それ！ 9年前の本じゃん？」

女 1 「えー？ マジ？」

男 2 「もう “廃村 ” になっってんじやない？」

女 2 「てゆうかさ、何でそんな古い本で調べてんのよ」

男 1 「しようがないだろ、俺はこの “ 日本中の穴場温泉 ” っのにすごく興味あつて中学生の時に買ったんだから… 今じゃ旅行会社でも取り扱わない超穴場な温泉村や、昔から伝わる独自のお祭りなどが沢山紹介されているんだからさ」

女 1 「だからって今でもあるとは限らないじゃない」

女 2 「そうだよ、交通費だって値上がってるのに時代遅れだよ」

男 2 「まあまあ… 折角ここまで来たんだし、取り敢えずこのまま歩いてみようよ… まだ昼前だし、もし村が無くなっていたら戻ればいいんだし…」

女 1 「あ…」

男 2 「ど、どうした？」

女 1 「あれ…」

全員 「ん？」

男2 「僕たちは村に向かう途中で、古い木造の学校を見つけた。子供たちが居ない校庭が、何とも不気味に見えた…」

男1 「もうすぐ着くぞ。この本によると学校の先に畑が見え… あ！ ほら！畑が見えてきたぞ！」

女2 「本当だ！ 橋の向こうは普通に道路になってんじゃん」

女1 「やっと人のいるところに着いたあ」

男2 「僕たちがバスを降り、目の前の山道を40分ほど歩くと… まるで村というより道路が舗装されていて普通に山に囲まれた町のようにだった… 橋の横には村の看板がある…」

男2 「かがみのかみ村か…」

男1 「お前、それ読み方違えよ。鏡の神の村と書いて“きょうじん村”って読むんだよ」

女1 「きょうじん村… 何か“進撃の巨人”の巨人が出てきそう…」

(そういいながら笑う女1)

女1 「だってさあ、周りが山の城壁に囲まれた町って感じなんだもん…」

男2 「そう… こんな山奥に突如現れた普通の町並みに僕たちはホツとしながら、今まで歩いてきた疲れも忘れて何時しか目的の宿を探しながらブラブラと歩いていた…」

男1 「お？ 店があるじゃん！ あそこで一休みしようぜ」

全員 「賛成！」

SE (戸を開ける音)

男1 「すみません」

全員 「こんにちは」

店主 「んん？ あれまあ… 珍しい… こげな若いお客さんが来るなんて何年振りかのお…」

男1 「俺たち東京から来ました」

女1 「あたし達、大学で旅行サークルをやっていて、あちこち田舎の郷土料理

や温泉を楽しんだり、自然を満喫している仲間なんです」

女2 「こちらには温泉と美味しい郷土料理があると聞いて来ました。今日から明後日までこの村の温泉宿でお世話になりますのでこちらにもお邪魔すると思いますので宜しくお願いします」

店主 「ほお… 東京から来た学生さんたちかい… この村にはあんた達と同じ年頃の者はおらんき、楽しめるか判らんが… まあ… ゆっくりしてき」

女1 「おじさん、これ下さーい」

女2 「あたしもこれひとつ」

男1 「俺はこれ」

店主 「はいはい… えっと… これとこれは百円、これは90円ね…」

女1 「安っ！ 東京じゃあ一本160円するよ」

女2 「2015年11月… って新しいし」

店主 「はっはっはっ… こんな山奥でも3日に一度、配達便はちゃんと来とるよ」

男1 「あのお… この村では今でもまだお祭りはあるんですか？」

店主 「ああ… 久々の来村者やき村の歓迎の祭りをするかの… 準備が出来たら呼びに行くき、楽しみに待っときな」

男2 「本当にあるんだ、お祭り…」

男1 「な？ だから言ったろ？ 今回はこの村を選んで正解だったろ？」

女1 「ねえ… そろそろ荷物置きたいし、今晚泊まるところに早く行こうよ」

男1 「そうだな」

女2 「あーっ あたしも早く温泉に入りたい」

女1 「ごちそうさまでした」

女2 「ごちそうさまでした」

男1 「ごちそうさま」

男2 「あ、僕まだ飲み物買ってない。おじさんこれ、お金ここに置いとくね」

店主 「ああ… まいど… あ！ 兄ちゃん！」

男2 「はい？」

店主 「祭りの時間までは山道の途中にある学校に近付かない様に皆に言っといてくれんかの」

男2 「どうしてですか？」

店主 「あの学校は夕方… そう… 4時43分になると… 皆、鏡神様の神隠しにあっってしまうんじやよ」

男2 「えっ？」

店主 「いいね… 祭りが始まる時間まで絶対に近付かないように…」

男2 「僕はその時思った… 現代において神隠しなんてありやしない…
 きっと村は昔から、この地の守り神に豊作と平穏な暮らしを願ひ、そして
 祭りで祝ってきた… しかし若い人たちは僕たちの様に都会に出たいが、
 小さな村では中々思うようにはいかない… だから若い人たちはこっそり
 村を出て行き、そして子供達は夕方に山に入って道に迷い… 帰って来
 れなくなるからと、神隠しに遭うと言ひ伝えたのではないかと…」

男1 「おーい！ 鈴木！ 何やってんだ！ 早く行くぞ！」

男2 「お… おう！（店主に）皆にも言っておきます。 ごちそうさまでした」

男2 「そういうと僕は早々と店を後にした…」

女1 「あ、宿が見えてきた」

女2 「はーっ やつと温泉に入れるー」

男1 「思ったより何か豪華じゃん」

旅館店員 「いらっしやいませ」

男1 「電話で予約した山田です」

旅館店員 「まあ、遠い中お疲れでしょう。 こちらにご記帳お願いします」

男1 「はい」

旅館店員 「では、お部屋にご案内いたします。」

SE (廊下を歩く音)

旅館店員 「男性の方はこちらへ、女性の方はこちらにどうぞ。 露天風呂はこの先
 の突き当りを右に行っていたかとありますのでごゆっくり…」

男2 「ありがとうございます」

女1 「ねえ、ひとみ。 早く温泉行こう」

女2 「だね。 おい！ 山田！ 鈴木！ 覗くなよ。」

男1 「今岡のなんて見たくもねえよ。 なあ、鈴木」

男2 「あはは…」

女2 「じゃ、ゆか、行こう」

女1 「待ってよー」

男1 「じゃ、俺たちはちよっくらその辺を探索するか？」

男2 「ああ」

男1 「あー こっちきてみるよ」

男2 「え？」

男1 「窓の外、目の前が川だぞ」

(目の前に川、よくみると魚も泳いでる)

男2 「あー 綺麗だね」

男1 「あとで降りてみようぜ」

男2 「うん」

男2 「窓の風景に見とれた僕はおじさんから言われた事を忘れてしまっていた…」

SE (川のせせらぎ音)

女2 「あーいいお湯だった」

女1 「ねえねえ、温泉凄いいよ。温泉の近くに川と繋がった水路があつてさ」

女2 「そうそう、その水路見ると珠に魚が泳いできてさ」

男1 「なあ、腹へらね？」

女1 「はーい。おなかすいたー」

男2 「そーいや昼ご飯まだったね」

女2 「晩御飯までまだ時間あるし、何か食べにいこうよ」

男1 「じゃ、その辺ブラブラしてみっか」

全員 「賛成」

男2 「僕たちは村をブラブラしたが店がない… とうるかここに来る時に寄った

あの商店と旅館以外は軒家ばかり… そこに一台の軽トラがやってきた」

村人1 「おや？ おめえさんたち何してんだ？」

男1 「俺たち食事出来る店を探してるんです」

村人1 「ここには食事出来る店は無えなあ… 唯一外食出来るのはこの先にある

蕎麦屋位だな… そーいや今夜は歓迎の舞やるで、そんとき沢山料理出っか
らそんときやたと食べらんと。わはは」

男2 「そーいうと村人はそのまま行ってしまった…」

女1 「ねえ、蕎麦屋でもいいから行こうよ」

女2 「そうしようよ」

男1 「じゃ、行くか」

男2 「そういつて僕たちは蕎麦屋に向かった」

男1 「あ、閉まってんじゃない」

女1 「折角来たのにい…」

女2 「はあ… あたし、お祭りの時間まで宿に戻って寝てよっかなあ…」

男1 「折角ここまでできたんだ。 バス通りまで出ないか？」

女2 「またあそこまで歩くの？」

女1 「めんどくさいよ」

男1 「いいじゃん。 確かバス停の近くに何か店あったし」

男2 「行って帰ってきた頃に丁度いい時間だね」

男1 「よし！ じゃ、出発」

男2 「そして僕たちは橋を渡り、砂利道を歩きはじめた」

㊦ (砂利道を歩く音)

女2 「ねえ…」

男1 「ん？」

女2 「あその学校寄ってみない？」

男1 「飯はどうすんだよ」

女2 「まだ時間あるしどうせ通り道じゃん」

女1 「何々？ 君たち何をコソコソ話してるんだい？」

男1 「いや、ひとみがちよつと学校に寄って行こうってんだよ」

女1 「えー？ だって誰も居ないんでしょ？」

女2 「だからみんなでコソソリ入っちゃおうよ」

男2 「その時、僕は店のおじさんから言われた事を思い出した…」

男2 「その事なんだけど… 来る時、飲み物買った店のおじさんがあの学校に近付くなつて言ってたよ」

女2 「なにそれ？ だって今は誰も使ってないんでしょ？ 関係ないじゃん」

男2 「でも、僕たちは村の人間じゃないし、村の人の言うことを聞かなきゃ…」

男1 「大丈夫だよ。 ちょこつと覗く位なら平気だって…」

女1 「じゃあ、行ってみよお！」
3人 「おー」

男2 「そういつてみんなは僕の言うことを聞かずに学校へ向かってしまった…」

女2 「木造の学校なんてテレビとか映画でしか見たことなかったんだよね」

女1 「あたし何だかワクワクしちゃう」

男2 「やっぱり止めようよ」

男1 「何だよ… おまえもしかして怖いんじゃないの？」

女2 「いやだあ… こんなに空が明るいのに？ (笑)」

男2 「そんなんじゃないよ… でも、ほら…」

女1 「あ、やっぱり怖いんだ？」

男2 「ち… 違うよ…」

SE (扉が開く音)

男1 「へえー 中は思ったより暗いな」

女2 「でも、結構綺麗にしてあるじゃん」

女1 「小学校の中に入るのって何か懐かしい」

男1 「ほー、奥は理科室か…」

女1 「きやあ！ 人体模型がこっち向いてる」

男1 「あはは。俺、昔、中の臓器とか持ち出して先生に怒られたっけな」

女2 「よくあんなの持てるね」

男1 「そーいや小学生の時って七不思議ってなかった？」

女1 「あった、あった」

女2 「夜になると人体模型が動くとか…」

女1 「誰も居ない音楽室のピアノから音がなるとか…」

SE (ピアノの音)

女1 「ねえ…」

女2 「う… ん…」

女1 「今… ピアノの音したよね…」

男1 「俺も確かに聞こえた…」

SE (ピアノの音)

全員 「ヒッ！」

男2 「か… 帰ろうよ…」

男1 「何だよ、おまえやっぱ怖いんじゃないか。よし、見に行くぞ。」

男2 「僕たちはピアノの音がした2階の音楽室を見に行くことになった…」

女1 「何か居たらどうしよう…」

女2 「したら山田が守ってくれるよ」

男1 「おう！ まあ… 安心しろや」

男2 「階段を上ると廊下のすぐ横に大きな鏡があった… その先に音楽室がある…」

男1 「(小さな声で) いいか、開けるぞ」

3人 「うん…」

SE (ガラツ！と入り口を開ける)

男1 「あれ？」

女2 「誰も居ない…」

SE (猫の声) ニャー…

女1 「何だ… 猫ちゃんか…」

女2 「何か拍子抜けちゃったね」

男1 「そうだな… じゃ、戻るか」

3人 「うん」

男2 「と、僕たちは音楽室を出て、階段の方へ向かおうとすると… いつの間にか上に上がる階段があった… というか… ここ… さっき確か大きな鏡があった筈？ あれ？ 気のせい？」

男1 「ここまで来たんだ、ついでに屋上まで行ってみようぜ」

男2 「そういつてみんなで階段を上っていくと扉があった…」

男1 「よいしょっと」

SE(ギー) 扉が開く音

男1 「あれ?」

女1 「どうしたの?」

女2 「え? どこ? へい!」

男2 「屋上に出た筈が、何故か学校の裏口だった!」

男1 「何だよ… 何で外?」

男2 「みんなは扉の向こうに出て行った! 僕も付いて行こうとした瞬間… いきなり扉が閉まって開かなくなった!」

男2 「あれ? 扉が開かないよ。 おーい! みんなー! 開けてよ! 開かないよ!」

SE(扉を開けようとする音)

男2 「おーい! 山田! 開けてくれよ! みんなー!」

男2 「いくら扉を叩いても返事がない! 僕は必死に開けようとしたがどう頑張っても扉は開かない! 僕は村の人に助けを呼びに階段を下りた!」

SE(駆ける音)

男2 「学校を出ようとしたが、何故か出入り口も開かない! 急がなきゃ! と思っただけを見ると廊下の窓が開いてるのに気付いた。 僕は焦りながらもその窓から外に出ようとした時、誰かに足を掴まれた。 必死に振り払って窓から出たのはいいが、窓から飛び降りた時に頭を打って気を失ってしまった! それからどれ位時間が経ったのだろう!」

SE(ザワザワ)

村人1 「おい! あんた! 大丈夫か?」

男2 「ん… んん…」

村人2 「お! 目が覚めたぞ」

男2 「みんなは… みんな無事なのか…？」

店主 「おまえさん… わしの言うこと訊かなかったんだな…」

男2 「すいません… あの… 他のみんなは… 学校の3階に…」

村人1 「ああ… 行っちゃったか…」

男2 「え？」

村人2 「この学校に3階なんて無え…」

男2 「え？」

店主 「おまえさんたちが見たのは黄泉の国の入り口じゃよ」

男2 「よみの… くに？」

村人1 「ほら… そこに小さなお堂が建っておろう…」

村人2 「村をお守りしてくださっている鏡神様が祭られているんじゃ」

店主 「新しくこの地に来た人間は、必ず村をあげて受け入れの儀式をして、鏡神様に認めてもらわないと、黄泉の国に連れていかれてしまうんじゃ…」

男2 「じゃ… じゃあ… 山田たちは…？」

店主 「もう… この世にはおらん… 助かったのはおまえさんだけだ…」

ズ 「現代ではありえない神隠し… でも… その地の守り神はあなたをジッと見ているかもしれません… ほら… すぐ後ろに…」

ズ 「ラジオドラマ アウター・ザ・ワールド その1 たましいの鏡」

作…

出演

男1… (山田)

男2… (鈴木)

女1… (木島ゆか)

女2… (今岡ひとみ)

店主…

旅館の店員…

村人1…

村人2…

ストーリーテラー…

テーマ音楽… KOU

演出…

ズ 「アウター・ザ・ワールド 次回をお楽しみに…」